

第3章

社会学と社会システム

1 社会構造と変動

社会学は「社会とは何か」という命題を探求する学問で、医学や法学など紀元前から続く学問と比較してはるかに浅く、フランス革命以降に誕生しています。社会学には多様な定義があり、一般に、狭義においては、集団や制度を媒介とし、人間の行為と社会全体の関わり合いを法則として明らかにし、社会生活上の諸問題に解決的にアプローチしていくものとされています。社会学はこの目的にそって、人間の行為について研究する行為論、集団・組織・制度・規範などについて考察する構造論、産業化・核家族化・都市化・過疎化など変化に注目した社会変動論の3部門に分類されます。社会学が、各分野において専門的な研究を進めながら、同時に社会全体を研究対象とするという独特の位置を占めていることと同様に、社会福祉士は、個々人の相談援助に専門性を生かして関わりながら、常に社会全体というマクロな次元を見据えて問題解決を図るという任務が課されます。その意味で、社会学を深く理解し、社会学的な視点から援助にあたることは、社会福祉士にとって必須かつ不可欠であるといえます。

ア 社会システム

(1) 進化論

① コント

コントは、中世に繰り広げられたキリスト教的な非科学性から脱却することこそ近代的な人間の進歩があるという考えのもと、社会は生物（有機体）と同じように成長するという《社会有機体説》を唱えました。人間とは、神学的段階→形而上学的段階→実証的段階と進化するものとし、その段階に合わせて、社会も、軍事的段階→法律的段階→産業的段階に進化するという3段階の法則を示しました。この考え方はミルを通じてイギリスに伝播し、スペンサーらに多大な影響を与えました。